＜被表彰者の功績概要＞

（１）教職員

①　和田　雄斗（桑名市立多度中小学校　教諭）

本県小学校教諭として着任以来、児童が主体的に学ぶ授業づくりに向け、先進的な他自治体での取り組み事例や文献をもとに、ICT を活用した「問いを創る授業」を実践し、さらに教員の指導力向上にも寄与した。

令和４年度には、市内の指導教諭により組織される「令和４年度小中一貫教育推進プロジェクト事業」に参加し、自身の研究してきた『問いを創る授業』と『ICT を文房具として活用する授業』の実践について、市内全体に向け発信を行い、市内小中学校における ICT 機器を活用した授業改善の推進に貢献している。

②　谷　理恵（津市立みさとの丘学園　教諭）

平成２９年に開校した本県初の義務教育学校において教務主任として学校運営に携わり、中心的存在となって９年間の一貫したカリキュラムを作り上げ、児童生徒、保護者、地域、同僚教職員からも絶大な信頼を得てきた。

また、小中学校統合による開校に伴い、それぞれの教育文化が融合するという困難な中、同教諭は一体感ある職場づくりをけん引し、児童生徒の９年間の成長を見越した義務教育学校を確立させた。

同校には義務教育学校創設を検討している県内外からの視察が多く、これまで約３０件の視察研修に対応し、義務教育学校の独自のカリキュラムをもとに、小中連携による学習指導や生活指導の実践を発信している。

③　西村　洋（度会郡大紀町立錦小学校　指導教諭）

本県小学校教諭として着任以来、三重県におけるへき地教育、とりわけ複式教育における実践研究を積み重ねてきた。

複式教育における「わたりの授業（※複式学級の授業方法の一つで、同一時間に教師が学年をわたって授業を行い、他学年の授業を並行して行うこと）」において、児童が主体的に授業に参加するための工夫を組み込んだ基本の流れを定着させた。それにより、教師が直接指導をしていない時間の児童の活動の質が高まり、自分たちで学習を進めていこうという主体性や、わからないところをわかる者が教えるなど協働性が育まれてきている。

同教諭の実践について、県内の市町教委及び学校関係者から授業見学や研修講師の依頼が多く、複式教育の指導者育成の面でも功績が顕著である。

④　寒作　一也（三重県立四日市工業高等学校　教諭）

平成２４年４月に、本県高等学校教諭として奉職以来、それぞれの勤務校において工業科教諭として教科指導力の向上に努めるとともに、地元企業等で活躍できる技術者の育成に尽力してきた。特に、四日市工業高等学校では、平成３０年４月、これからの時代を担う若き技術者の育成を目的として、地域産業界からの期待を受け設置された「ものづくり創造専攻科」において、設置当初から担当教員として、教育活動を支援する企業の集まりである「協働パートナーズ」との関係強化、協力企業の拡大等を行い、地元企業で毎週行う実習や地元企業の海外事業所等でグローバルな視点を取り入れた海外インターンシップを実施する等、地域に貢献する人材の育成に力を注いだ。

また、大学教員や企業で実績のある外部指導者による講義を積極的に導入し、生徒の専門性を高める授業を実施した。コロナ禍においても、企業技術者や経営者からの講義をオンラインを活用して実施するなど、ICT を活用した教育活動にも積極的に取り組み、常に授業方法や内容の改善・向上に努めている。

さらに、地元ショッピングセンター等において、ものづくり体験教室などを開催し、専

攻科の特色を地域に広くPRすることにより、専攻科の教育活動を周知するとともに、子どもたちに次世代を担う技術者となるための意識の醸成に努めている。

⑤　毛利　磨紀（三重県立特別支援学校北勢きらら学園　教諭）

平成１０年４月に、本県養護学校教諭に奉職以来、病弱教育校、知的障がい教育校、そして、肢体不自由教育校である現任校の北勢きらら学園に勤務し、様々な障がい種別の教育に携わり、特別支援教育に係る専門性の向上に努めてきた。特に、北勢きらら学園では、平成２７年度の国立特別支援教育総合研究所での研修の経験を踏まえた自身の取組や、学校全体の授業力向上のため中心となり、授業改善シートや動画を活用して取り組んだ内容について、日本肢体不自由児協会の機関紙「肢体不自由教育No.228」へ寄稿した。

また、平成２９年度、同３０年度には、同校の研修部長として、同校における医療的ケア体制と教育環境において、気管切開部からの吸引が必要な児童について、医療や地域福祉の専門家と連携し、児童にとって安全で安心な教育環境となるような整備に取り組み、その内容を中部地区肢体不自由教育研究大会で発表した。

さらに、令和３年度からは特別支援教育コーディネーターとして、就学支援委員会において、医師、大学教員と意見交換し、市町の小中学校長等へ助言を行う等、一人一人の児童生徒が、各々に適した環境で充実した学びが得られるよう尽力している。

⑥　栗谷　英樹（三重県立飯南高等学校　教諭）

平成２５年４月に、本県高等学校教諭として奉職以来、それぞれの勤務校において福祉科教諭として教科指導力の向上に努めるとともに、キャリア教育に係る専門性を高めてきた。特に、飯南高等学校では、令和２年度から進路指導主事として、３年間を通した系統的なキャリア教育を推進し、地域の魅力ある企業の情報収集や職場支援等を行う就職実現コーディネーターとの情報交換で得た内容をもとに、日々の進路指導に苦心する教職員への情報共有やアドバイスを行い、組織的な進路指導体制を構築している。

また、多様な特性のある生徒が個に応じた進路希望を実現できるよう、市町の社会福祉協議会等と連携して就職先を開拓するとともに、福祉科教諭としての専門性を活かし、学級担任とともに丁寧な対話を通した指導を行うことで就職につなげる等、地域の関係機関と連携したキャリア教育を実践している。また、連携型中高一貫教育に取り組む自校において、同人は、中高一貫生徒交流委員会の委員長として、令和３年１２月、企業１９社が参集し、ブース形式で飯南高校２年次生徒と飯南中・飯高中２年次生徒が交流する合同の「企業交流会」を開催する等、中学からから高校まで６年間にわたる、飯南・飯高地域全体でのキャリア教育を推進している。さらに、地域との連携したこのような取組は、県外の学校からの視察を受ける等、県内外のキャリア教育の推進にも寄与している。

⑦　藤田　正知（高田高等学校　教諭）

当該教諭は、本校（高田中・高等学校）において建学の精神である「仏教教育」に取り組むとともに、部活動として、平成２０年度から仏青インターアクト部を率い、福祉やボランティア活動など社会貢献を通じた地域との連携を意識し、地域とのつながりづくりで心を豊かにする教育を実践している。授業では、生命の尊厳性と人権の尊重、社会生活におけるマナーの遵守を教えるとともに、先般、国宝に指定された高田本山専修寺に係る学習を通して、その建築技術と美しさを理解することから歴史的文化財への関心を高め、深化するよう指導している。授業の理念の実践活動として、部活動において、地域とのつながりを大切にしながら、多くの社会貢献を行っている。